物語～榊ヶ原やまいとの関係～

匿名希望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
物語～榊ヶ原やまいとの関係～

【Ｎコード】
Ｎ２０９８ＢＡ

【作者名】
匿名希望

【あらすじ】
僕と彼女の関係。
それは勿論、一言では言い表すことはできないし、言い表せる言葉なんて存在しないだろう。
それでも、この関係に至った経緯ならお話しできるかもしれない。
「だからとにかく聞いてくれ。これは大事な話なんだ。」

前置き（前書き）

初投稿作品となります。
あたたかい目でみてくれたら嬉しいです。

前置き

榊ヶ原（さかきがはら）やまい、という少女は、有体に言って優等生だ。

それなりに頭がいいらしく、成績は学校内でもトップ。しかしそれはあくまで学校内という話であって、全国レベルでみると、そこまで抜きん出た人間というわけではない。

スポーツも得意だそうだ。部活動には所属していないものの、体力テストの成績は学校内でトップクラス。しかしこれもあくまで学校内という話で、全国レベルでみたらまあまあの部類だろう。漫画やアニメみたいに、男子より優れた身体能力を持っているわけでもない。

それでも、学校内で勉強、スポーツの両方で上位をとれるような人間は、やはり有名なのだろう。噂話に疎い僕にまでも、まるでスターのような彼女の話は届いてくる。

今日榊ヶ原が学食で何を食べた、今日榊ヶ原が誰々に話しかけていた、榊ヶ原に彼氏はいないらしい、榊ヶ原は彼氏を作るつもりはないらしい、とかそんなどうでもいい話が噂となって学校中を跋扈している。

学校内では有名人扱い、いや、スター扱いだ。

しかし、彼女を学校内で、有名人たらしめる要素は、勉強やスポーツだけではない。もう一つある。思春期の高校生には欠かせない、もう一つの要素が。僕が思うに、多分これが、彼女が学校内で有名である一番の理由だろう。

彼女は、容姿がいいのだ。それも可愛いとかそんなものじゃなく、綺麗とか、美しいとか、そんなことを思わせる容姿をしている。高校生にしては大人びた顔立ち、顔のパーツのバランスの良さ、平均よりも少しだけ高いであろう身長、細身とはいえか弱さを感じさせないプロポーション、どれをとっても完璧だ。

そんな優等生、榊ヶ原やまいと、学校内では落ちこぼれの部類に

入る僕に、本来関係性など生まれない。関係性など生まれる余地さえない。

とか、そんな事を思っていた頃が懐かしく感じる。

今となっては彼女と僕は、切っても切れない、どう足掻いてもほどけない、離れようにも離れられない、密接な関係に陥ってしまっているというのに。

彼女は僕なしでは生きていけないし、僕も彼女なしでは生きられない、そんな馬鹿げた、御伽噺（おとぎばなし）のような関係性。

勿論、そんなことになった原因は僕にあるし、彼女にもある。

だから、これから語るお話はそんな懺悔（ざんげ）のお話だ。

多分、僕はただ話したいだけで、喋りたいだけだと思う。嘘みたいな、現実離れした、架空の出来事のような、中学生の妄想みたいな、現実味の全くない僕の現実ってやつを。

だけれでも、聞いてほしい。お願いだから聞いてくれ。

これは、僕と彼女の話だ。

出会い（前書き）

更新しました。

出会い

ただ今7月1日午後9時である。

僕らの町は、都市近辺の郊外と言ったところだろうか、こんな時間でも、ある程度のお店は開いていて、そこまで暗くはならないような、そんな町である。

しかし、やはりそれは大通り沿いの話で、いったん脇道にそれてしまえば、一般家庭の住宅が閑散と並びひしめく、ありふれた住宅街になっている。

僕らの学校は、そんな所にある。大通りからそれた住宅街のど真ん中。

個人的には、家が近くて通いやすいのだが、客観的にみて住宅街のど真ん中にあるのはどうかと思う。

だがしかし、進学校だけあって、設備やその他諸々に関しては、ものすごく整っているので、別に不満をいうつもりはない。むしろ大歓迎だ。

そう、進学校である。この町屈指の進学校。

正式名称、賢律（けんりつ）高等学校。（賢律高校は県立高校なので、県立を入れたら2回けんりつを繰り返すことになる）

可笑しな名前だと思う。賢く律する、だなんて、どんな堅物が通う学校だ。ただまあ進学校であるが故に、そこの生徒たちはある程度勉強が出来る人間が多いのも確かだ。ほとんどの人間が、大学進学をめざしているからだろう。だがしかし、そこの人間が優秀な者が多いとしても、自分はその種類の人間からは除外されるべきだと思う。なぜなら、進学校でまさかの赤点をとるような人間がいたら、それはきっと僕なのだ。

まあ僕の成績のことはどうでもいいとして、そんな学校の周辺を、暇を持て余してぶらぶらと散歩していたときのことである。特に目的も無かった。あても無く、本当にただの暇潰しで、歩いているだ

けだった。
そこで、学校の塀に沿って進んでいたその時である。
ふいに、水音がした。
何と表現すればいいのか分からないが、人間がとても上手に水面に飛び込んだ、みたいな、そんな水音だった。ポチャン、だかパシャンだか、とにかくそんな音。
辺りを見回してみるけど、別段そんな気配はない。
それじゃあ学校からだろうかと思い、学校の塀を見上げてみる。
そういえば、この塀の向こうは、プールだったはずだ。ならば、プールに誰か飛び込んだのだろうか。誰なのだろう。知ろうにも、うちの学校のプールは、塀に囲まれていて、外からは見えない造りになっている。
自分の中の、好奇心というものが疼きだす。
塀の高さを考えると、さすがに乗り越えるのは無理そうだったので、裏門まで回ることにした。幸いにも、裏門とプールは近い位置にある。裏門を乗り越え、プールの入口までいくと、そこで入口が閉まっていることに気付く。しかたなく更衣室の窓を覗いてみても、鍵がかかっていて人の気配はない。おかしい。
それじゃあプールには誰もいないのだろうか。
そんな事を思った矢先、また水音がした。さっきと同じような水音だ。
やはり、いる。今の音はどう考えてもプールからだ。
辺りを回すと、プールの更衣室の屋上に続く、梯子があった。梯子といっても、壁に鉄の棒が刺さっているだけだが、別段、上れないわけでもない。
辺りを気にしつつ、梯子に手を掛ける。なるべく音を立てないようにしながら、一段一段上っていく。
屋上につくと、這うようにしながら、プール側への淵へと進む。そしてついに、僕はプールが見える位置まで辿りついた。
だが安心してはいけない。本当にプールに人がいたとしたら、見

つかったら不味い。覗きだと思われてしまう。だからまだ顔は上げない。
慎重に、とてつもなく慎重に、耳を傾ける。
水音がする。今度は連続した小さい音だ。きっと泳いでいるのだろう。泳いでいるなら、更衣室の屋上なんかに目は向けてはいないはずだ。
そう思い、静かに顔を上げた。
……目を疑った。
そこには、一人の少女がプールを優雅に泳いでいた。月明かりに照らされ、なんとも幻想的な風景だ。とても綺麗な、美しいとも言えるフォームで背泳ぎをしている。しかし、そんな所には、全く目がいかなかった。
なぜなら、彼女がその身に、衣服を一枚も、ほんの一枚も、たったの一枚も、ただの一枚も、全く着けていなかったからである。
つまり、全裸だった。
正直言って、とても驚いた。驚愕した。驚嘆した。そしてそれ以上に困惑した。そのせいだろう、普段はあまり言葉を発しない自分の口から、
「うわぁ……」
と、そんな困惑とも言える、呆れとも言える、驚嘆とも言える、そんな声が出てしまった。
やってしまった、と思った。思った瞬間にはもう僕は、屋上のプールとは反対側、つまり、梯子がある側の淵へと移動していた。
しまった、失敗した。
今の声は不味い。聞かれたかもしれない。相手まで聞こえるか聞こえないか、微妙なラインの声量だった。
微妙なら、最悪の場合を考えて行動するべきだ。つまり、相手に聞かれた。そう思っておくべきだ。
幸いにも、僕の行動の迅速さで、顔は見られていないだろう。しかし、向こうの顔も、遠すぎて誰だか判別できなかった。

だいたい、こんな夜中とも言える時間に何故、こんな所で泳いでるんだ。しかも全裸で。おかしすぎるだろう。
一瞬の出来事なので判断は難しいが、プールサイドにうちの学校の女子の制服が落ちていた。そこから考えるに、あの女子は、ここの生徒だ。スカートの色で、学年を分ける仕組みなので、あの色は1年生。つまり僕と同じ学年の女子なのだろう。
どうする、このまま逃げるか。いやでも、もし聞かれていないのだとしたら、もう一度くらいあの裸体を見てみたい。一瞬だったが、そう思えるほどあの女子、かなりいい体系をしていた。
と、そんな煩悩を考えていたときのことだった。
ぽんっ、と、プール側の屋上の淵に指が掛かった。人間の指だ。
「え？」
指が掛かったと思ったら、次の瞬間、少女が飛び上がってきた。これは、比喩でも何でもなく、本当に飛び上がってきた。
屋上に、スタッ、というような擬態語がまさしく似合うような綺麗な着地を決め、少女はこちらを向く。
え？
この女子、まさかあれか、屋上に指を掛けた懸垂みたいな状態から、腕の力だけで屋上に飛び上がったのか。と言うより屋上までジャンプで指が届くのか。
と言うよりと言うより、いつの間に着替えた。衣擦れの音なんてしまかったぞ。と言うよりと言うよりと言うより何の物音もしなかったはずだ。
と、そんな疑念と疑問に、押しつぶされ、混乱し、頭の中がぐちゃぐちゃになったその時、目の前の少女が口を開いた。
「始めまして、榊ヶ原やまいです」
これが、僕と彼女、僕と榊ヶ原やまいの関係の、始まりだった。

出会い（後書き）

受験生なんで、更新するのは、遅いかも知れませんが、ここまで見てくれた方は、どうぞ気長に、続きをお楽しみにしていてください。

顔合わせ

「始めまして、榊ヶ原やまいです」

一瞬、度肝を抜かれた。この女子、今挨拶したのか？

それに、榊ヶ原やまいだって？

この女子がか？

この女子が学校中に名を轟かせているあの榊ヶ原やまいか？

確かにこうして見てみると、とても綺麗な容姿をしている。こんな状況じゃなければ、見蕩れてしまいそうなほど美しい造形だ。高校生とは思えないぐらいの雰囲気も持っている。

でも待て、なんでそんな学校の有名人とも言える人物が、夜の学校のプールで一人泳いでるんだ？しかも裸で。

それに、それを覗いていた男子に向かって挨拶してきている。何を考えてるんだ？

「何を考えているんだ、とでも言いいたげな顔をしていますね」

「……！！」

「私の裸を見られてしまったことは、重々承知しています。そしてそれを踏まえた上で、お願いをさせていただきたいのですが、よろしいですか？」

「え……、あ、あぁ……」

いきなりの台詞に、曖昧な感じで応える僕。

なんだこの女子、裸を見られたことで遠慮して、僕に対して下手に出ているのか。変わった奴だ。それとも裸を見たことをネタに、僕を脅そうとでもしているのだろうか。それにしても、お願いだと。

「私が今日、夜のプールに不法侵入して一人で泳いでいたことを、絶対に口外しないでいただきたいのですが、よろしいでしょうか？」

「……へ。あ、あぁ、なんだ、そんなことか、わ、分かったよ。口外はしないよ。うん、絶対」

なんだ、そんなことか。必要以上に緊張してしまった。
「ありがとう御座います。ところで不躾ですが、あなた、私と同じ、この学校の1年の方ですよね？」
こいつ、僕のことを知っているのか。
「あ、ああそうだよ。なんで分かったんだ？」
こいつに対して、どんな対応をすればいいのか、いまいち分からない。自分から相手に対して対応しづらいように、わざとそういう態度をしているようにも思える。
「いえ、何度か学校内で顔を御見かけしたことがあったので」
「そうなの、うん、ぼ、僕も君知ってるよ、榊ヶ原、さん、だよね。君、結構有名人だろ。よく噂を聞くよ」
「そうですか。ありがとう御座います。ところで……」
「ちょっと、その畏まった喋り方、やめてくれないかな。わざと、なんだろ？」
全く、対応しづらいったらないぞ、こいつ。せめて、敬語はやめてもらおう。
「畏まってない喋り方、といえば、これで、いい、かしら？」
「ああ、そうだな。それがいい、やっぱ普通がいいな、普通最高」
「ところであなた、私に、何も言わないの？」
ん、なんだその諭すような質問の仕方は。やはり、謝罪を求めているのか？裸を見てしまってすみません。という言葉でも求めているのか？
なら、そうだな、謝っておくべきだ。
「そ、そうだな、すまなかった。確かに覗いてしまったが、まさか裸だとは思わなかったよ。本当にすまない」
「え？」
「ん？」
なんだ、謝罪を求めているわけじゃなかったのか。じゃあどんな言葉を求めているんだ？
「あなた、私を、脅したりしないのね」

脅したり？ああ、こいつ、裸を見られたことをネタに、脅されると思っていたのか。なるほどなるほど。
「脅す、だなんて、そんな酷いこと、そうそうする奴いないんじゃないか？少なくとも僕はしないよ」
「そう、そうなの。それはよかった。嬉しいわ。ありがとう」
あ？こいつ、一瞬残念そうな目になったぞ。僕の思い込みか？
「そういえば、もう一つお願いがあるの。聞いてくれる？」
「ん、ああ、いいよ。なんだ？」
そこで彼女、榊ヶ原は、神妙に、一拍間をおいて、次の台詞をつむいだ。

「今晩、私に寝床を提供してくれないかしら」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2098ba/

物語～榊ヶ原やまいとの関係～

2012年1月6日23時50分発行